

興福寺西室の調査

—第516次

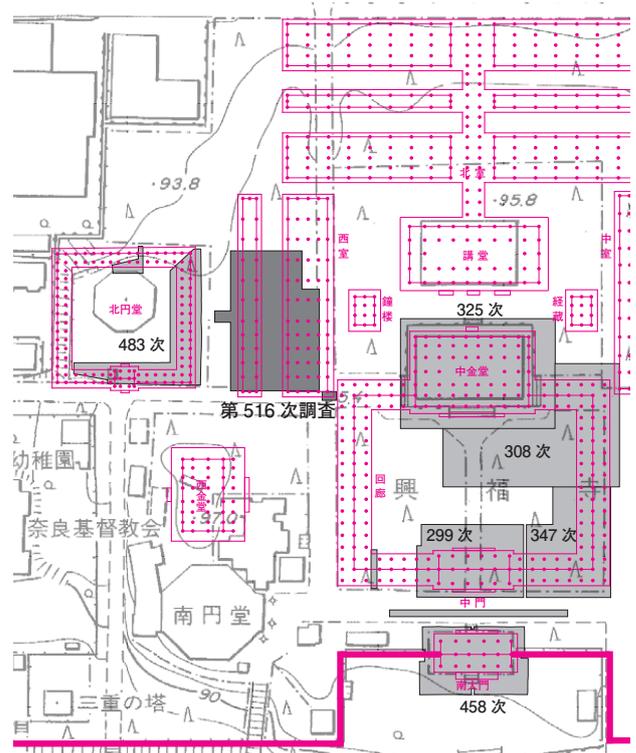
1 はじめに

興福寺では「興福寺境内整備基本構想」(1998年)に基づき、寺観の復元・整備が進められている。この整備事業にともない、奈良文化財研究所では1998年以来、中金堂院、南大門、北円堂院の発掘調査を継続しておこなっている。本調査もその一環として、西室(西僧房)を対象として調査をおこなった。調査区は西室の南半分に設定した(図Ⅲ-59)¹⁾。北円堂院との間の遺構の状況を確認するため西側中央付近に西拡張区を、西室の東南隅および基壇外装を確認するため東南隅に東拡張区を設けた。調査面積は985㎡である。調査は2013年6月3日に開始し10月11日に終了した。

2 西室の概要と既往の調査

西室の概要 僧房とは僧侶が生活する建物で、桁行の長い建物を仕切って多くの小部屋を造る。大寺では梁行の大きな大房と、梁行の小さな小子房とが、柱筋を揃えて並行して建てられた。興福寺は、中金堂と講堂の西・東・北をコの字型に取り囲む三面僧房を有しており、西僧房は「西室」、北僧房は「北室」、東僧房は「中室」と呼ばれている。西室と中室は大房と小子房からなり、北室は上階僧房、小子房、下階僧房の3棟が並列していた。西室の建立年代はあきらかではないが、諸史料から中金堂院の他の建築と同じ720年代とみられる。西室は、建立以後8度罹災したとみられ、最後の焼失は享保2年(1717)で、以後再建されることはなかった。また、江戸時代中頃の絵画資料には、西室大房は描かれるが小子房は描かれていないものがあり、小子房は大房より早く廃絶していたとみられる。

既往の調査と復元 興福寺の僧房にかかる調査としては、1955年におこなわれたガス管理設工事の際、西室大房の東・南・北面で基壇外装(凝灰岩の地覆石および羽目石)確認している²⁾。1956年におこなわれた食堂発掘調査の際に、中室小子房の東・南面で基壇外装(凝灰岩の地覆石、羽目石および葛石)とその外周に石敷きを検出している³⁾。これらの調査はトレンチによる部分的なものにと



図Ⅲ-59 第516次調査区位置図 1:2500

どまっている。興福寺の西室に対する本格的な調査は、今回が初めてである。

西室の建物規模については『興福寺流記』など複数の史料に記述がみられるが、史料により異なる点も多い。従来の復元は『興福寺流記』と地表に露出している礎石の実測をもとにしたもので、大岡実による案⁴⁾と鈴木嘉吉による案⁵⁾がある。大房について、両案とも梁行方向は4間、総長45尺とし、『興福寺流記』の記述と同じであるが、桁行方向の復元が異なる。大岡案は桁行9間、総長は202.5尺、柱間寸法は22.5尺等間としており、北室との規則性を重視した案である。鈴木案は桁行11間、総長は210尺、柱間寸法は北6間は22.5尺、南5間は15尺とする。

3 基本層序と検出遺構

地形と基本層序

調査開始前の調査地の地形はおおむね平坦で、調査区の北西部では北西に向けてわずかに傾斜している。地表には複数の礎石が露出していた。調査区東面と南面は興福寺境内の道路に面し、西室大房の東側柱筋想定位置は道路の路面にあたる。調査区内にはマツ等の樹木があったが、大木の根以外は調査前に撤去した。

基本層序は以下のとおりである。上から表土、黒褐色砂質土(カワラケを多く含む、近世の包含層)、明黄褐色粘土あるいは黄褐色砂礫土の地山である。南北溝SD10434の



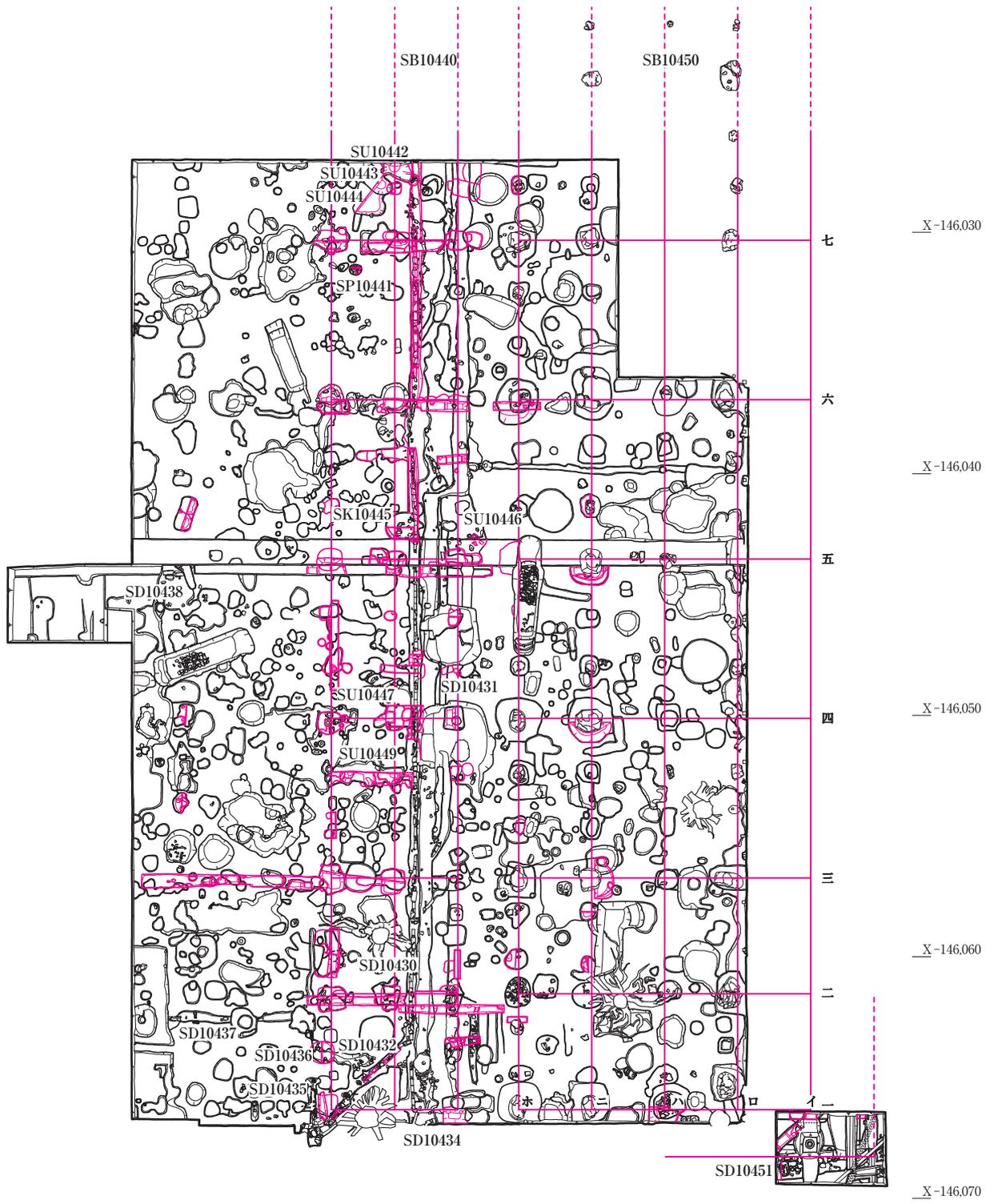
|Y-15.550

|Y-15.540

|Y-15.530

|Y-15.520

|X-146.020



图Ⅲ-60 第516次遺構図 1 : 250

東側、西室大房の基壇の範囲では灰褐色砂質土の整地土を確認した部分もあるが、基本的には地山上面で遺構を検出した。遺構検出面はSD10434の東側より西側が0.3mほど低く、東側ではほぼ平坦なのに対し、西側では北に向けて緩やかに標高を下げる。また、調査区西端から北円堂院に向けて削平が大きく、遺構検出面はSD10434付近と比べて0.3mほど低い。遺構検出面の標高は調査区東南隅で95.31m、北西隅で94.60m、西拡張区で94.50mである。

検出遺構

西室大房SB10450 梁行4間の南北棟礎石建物で、桁行7間分を確認した(図Ⅲ-60)。礎石(調査前にすでに地表に露出しているものも含む)および礎石据付穴・抜取穴を検出した。東側柱筋の礎石は境内道路を敷設した際にすべて失われたとみられ、東拡張区で東南隅の礎石据付掘方のみを確認した。また、境内道路際に並ぶ東入側柱筋の礎石はすべて落とし込みの穴をとまっており、出土遺物から近代に原位置から動かされたと考えられる。

今回の調査で建物の北端は確認できていないが、1955年の調査および調査区外で地表面に露出している礎石位置を根拠とすると、SB10450の建物規模は南北62.54m(212尺)、東西11.8m(40尺)、桁行10間、梁行4間に復元される。柱間の寸法は、桁行の南端2間が4.72m(16尺)、以北が6.64m(22.5尺)等間、梁行は2.95m(10尺)等間となる(1尺=0.295mとする)。

礎石は、大きさが長径約90~115cmの安山岩の自然石で、柱座などの造り出しはもたない。礎石は上面が赤変しているものもあり、火を受けた痕跡とみられる。これらの礎石のうち、近代に動かされた東入側柱筋のものを除く8石(二一、ホ一、二三、ホ三、二四、ホ四、二五、ホ七)は、抜取痕跡や据え直し痕跡が認められない。また、礎石据付埋土が精良であり遺物が含まれないことから創建当初の位置を保っているとみられる。一方、礎石抜取穴の埋土には瓦や拳大の礫が多く含まれていた(図Ⅲ-63石)。「二七」の礎石は、下に瓦を差し込んだ状態で検出されており、礎石を抜き取る際に下に瓦を差し込んで石を浮かせようとした可能性も考えられる。

桁行の各柱間に2基ずつ、長径約45~60cmほどの小型の礎石および礎石据付穴・抜取穴を確認した。これらの多くはいずれかの時期の再建の際、据え直したとみられ

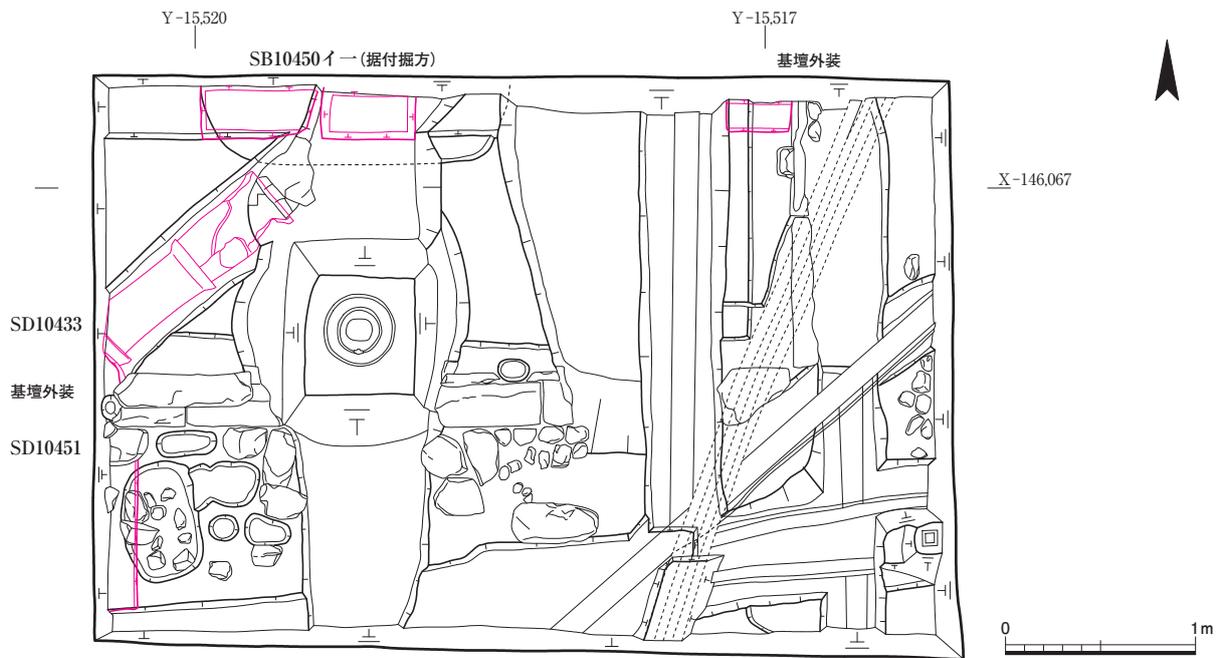
るが、「二五」の北側に位置する小型の礎石は原位置を保っている。石を2段に積んで後に高さを調整したとみられる箇所もあった。

基壇 西室大房SB10450の基壇は砂礫を含む明黄褐色粘土からなる地山を削り出し、上面にわずかに積み土をして築成したとみられる。東拡張区では、西室大房東南隅の基壇外装と雨落溝を検出した。いっぽう西面の基壇外装想定位置では、基壇外装や雨落溝などの痕跡は検出されなかった。礎石上面の標高は約95.5m、基壇外装地覆石上端の標高が約95.0mであり、基壇上面と礎石上面との比高を約10cmと仮定すると、基壇高は約45cmに復元できる。

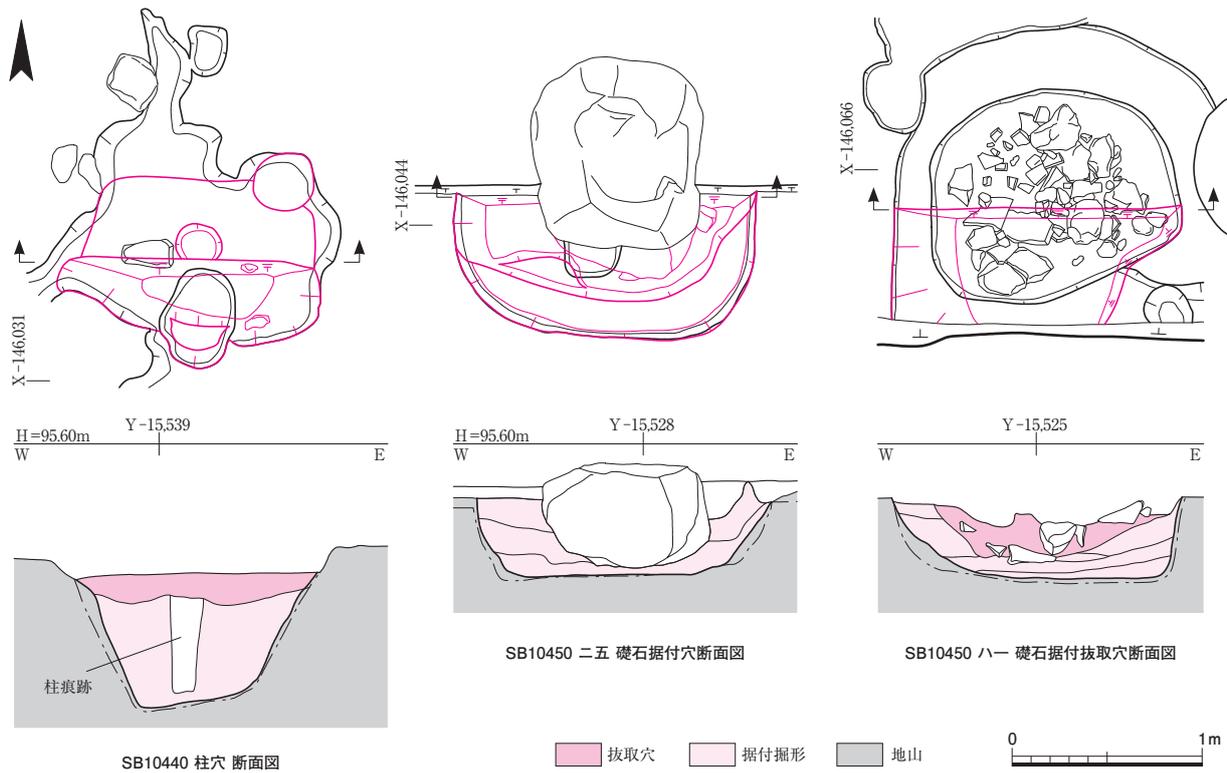
基壇外装 基壇南面と東面の地覆石および羽目石の一部が残存していた(図Ⅲ-62)。石材はいずれも凝灰岩である。南面は比較的残りが良いが、東面は後世の削平を受けて地覆石・羽目石とも外側が大きく削り取られていた。側柱筋と地覆石外側の距離は、南面が2.1mを確認し、東面が2.7mに復元できる。また、1955年の調査で、南北基壇地覆石外角の距離は66.44mと確認されており、



図Ⅲ-61 SB10450基壇外装・SD10451(南西から)



図Ⅲ-62 第516次東拡張区遺構図 1:40



SB10440柱穴 (南から)



SB10450二五 礎石据付穴 (南から)



SB10450ハ一礎石据付採取穴 (南西から)

図Ⅲ-63 SB10450礎石据付穴(二五)・採取穴(ロ一)・SB10440柱穴 断面図・写真



図Ⅲ-64 土管暗渠SD10435南端とSD10432 (南西から)

上述の復元建物規模から、北面の基壇の出は1.8mと復元できる。地覆石は計6石残っており、幅30cm、高さ16cm、長さは80cm。上面の基壇側を8cm幅で深さ1cmほど切り欠き、羽目石の仕口とする。羽目石は幅17cmで、高さは最大15cm、長さは最大69cmが残る。葛石や束石は確認できなかった。また、地覆石・羽目石の内側にこれらの据付掘方を検出した。据付掘方は幅52cm、深さは検出面から22cmが残る。

石組溝SD10451 基壇外装の南面と東面に接して石組みの溝を検出した(図Ⅲ-62)。西室大房の雨落溝にあたとみられる。南面には外側の側石が立ち上がるころまで残存する部分がある。幅40cm、深さ10cm。20cm程度の上面の平らな自然石を2列並べ底石とする。部分的に10~15cmの石を敷き詰めた部分があり、時期は不詳ながら、後世に補修した形跡とみられる。

掘立柱建物SB10440 桁行7間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物。西室の西側柱筋から約2.5m西の位置に西室と梁行方向の柱筋を揃えて建つ。柱間寸法は、桁行は南端2間が約4.8m、以北が約6.6mであり、梁行は約2.6mである。据付掘方は一辺0.8~1.2mの隅丸方形で、深さは検出面より0.8~1.0mが遺存する。3基の据付掘方で柱痕跡を確認しており、柱径は約20cmである(図Ⅲ-63



図Ⅲ-65 土管暗渠SD10430とSD10432 (北から)

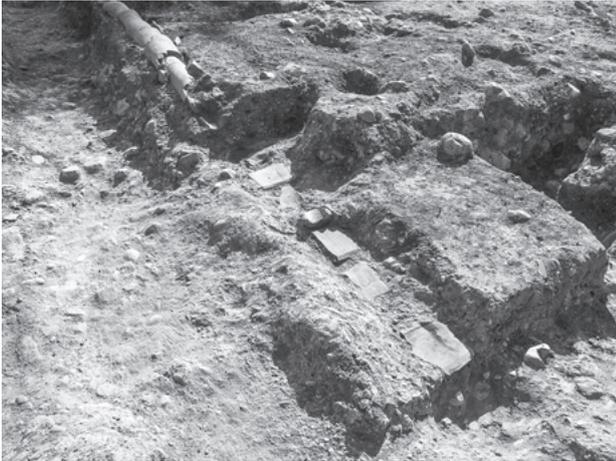
左)。また、桁行方向の柱間を三等分する位置に小型の柱掘方を検出した。大きさ、平面形状、深さともに不揃いだが、間柱または床束の痕跡である可能性がある。

建物の創建時期は、据付掘方埋土に遺物をほとんど含まないため詳細は不明である。据付掘方の埋土が地山由来とみられる礫混じりの黄褐色砂質土であるなど、西室大房の礎石据付穴の埋土の様子とよく似ており、古代までさかのぼると考えられる。建物の廃絶時期は、後述の土管暗渠SD10430・10431・10432が敷設されるより前で、据付掘方を被覆する包含層の遺物より室町時代が下限となる。

その他の遺構

穴SP10441 調査区北西で検出した小土坑。径50cm、深さ25cm。内部には丸瓦が径約15cmの礫とともに詰められており、平安時代の須恵器杯、鉢、双耳壺が出土した。

土管暗渠SD10435・10436・10437 調査区南西で検出した土管暗渠。SD10435は南北方向の暗渠で長さ約8m、SD10436・10437は東西方向の暗渠でそれぞれ長さ約4mと約6m分を検出した。SD10436は西端が、SD10437は東端がSD10435と接続し、一連のものになるとみられる。削平が激しく大半の土管が失われているが、幅40cm程度、深さ20cm程度の素掘り溝に瓦質の土管を掘



図Ⅲ-66 土管暗渠SD10430下層の瓦(北東から)

え、その上に平瓦を載せていたとみられる。SD10435は調査区南端で凝灰岩片を用いて補強されており、この部分を後述するSD10432に壊されている(図Ⅲ-64)。また、SD10436もSD10432に壊されている。SD10435・10436には行基式の丸瓦円筒土管が使用されている。

土管暗渠SD10438 調査区西端で検出した東西方向の土管暗渠。長さ0.8m分が残存する。土管暗渠SD10435・10436と同様、行基式の丸瓦円筒土管が使用されており、一連の暗渠になる可能性がある。

土管暗渠SD10430 調査区中央を南北に縦断する土管暗渠(図Ⅲ-65)。幅40cm程度、深さ25cm程度の素掘り溝に瓦質の土管を設置し、その上に平瓦または丸瓦を載せ、土で埋めて暗渠とする。土管の繋ぎ口の方向が場所により異なること、土管の繋ぎ口が2種類あること、傾斜の方向が場所により異なることなどから、後世に改修された部分が多いのはあきらかである。土管の下から平瓦・丸瓦を並べた深さ20cm程度の溝が検出された部分もある(図Ⅲ-66)。土管は繋ぎ口が2種類あり、14～16世紀のものともみられる。また、土管の上に乗せられていた平瓦・丸瓦の一部には刻印があり、室町時代のものともみられる。

土管暗渠SD10431 土管暗渠SD10430の約1m西側で検出した南北方向の土管暗渠。SD10430同様、素掘り溝に瓦質の土管を設置し、土で埋めて暗渠とする。幅40cm、深さ20cm、長さ約17m。南北両端はゆるやかに西へ曲がり、SD10430に接続する。

土管暗渠SD10432 調査区の南端で検出した北東-南西方向の暗渠。長さ約5.8mを検出した。北端は土管暗渠SD10430と接続し、南端で東西方向に折れ曲がる。幅40cm、深さ25cmの素掘り溝に瓦質の土管を設置し、上に平瓦または丸瓦を載せる。SD10430との接続部分では



図Ⅲ-67 土器溜SU10442・10443・10444(南東から)

SD10430を一部分壊して取り付けている。南端は土管暗渠SD10435を補強している凝灰岩片ごと壊して設置されている。また、掘立柱建物SB10440の西南隅の柱穴と重複関係があり、これより新しい。

土管暗渠SD10433 東拡張区で検出した北東-南西方向の暗渠(図Ⅲ-62)。幅45cm、深さ45cmの素掘り溝に瓦質の土管を設置する。土管は2種類あるが、直径25～30cmと大型で、近代のものである。

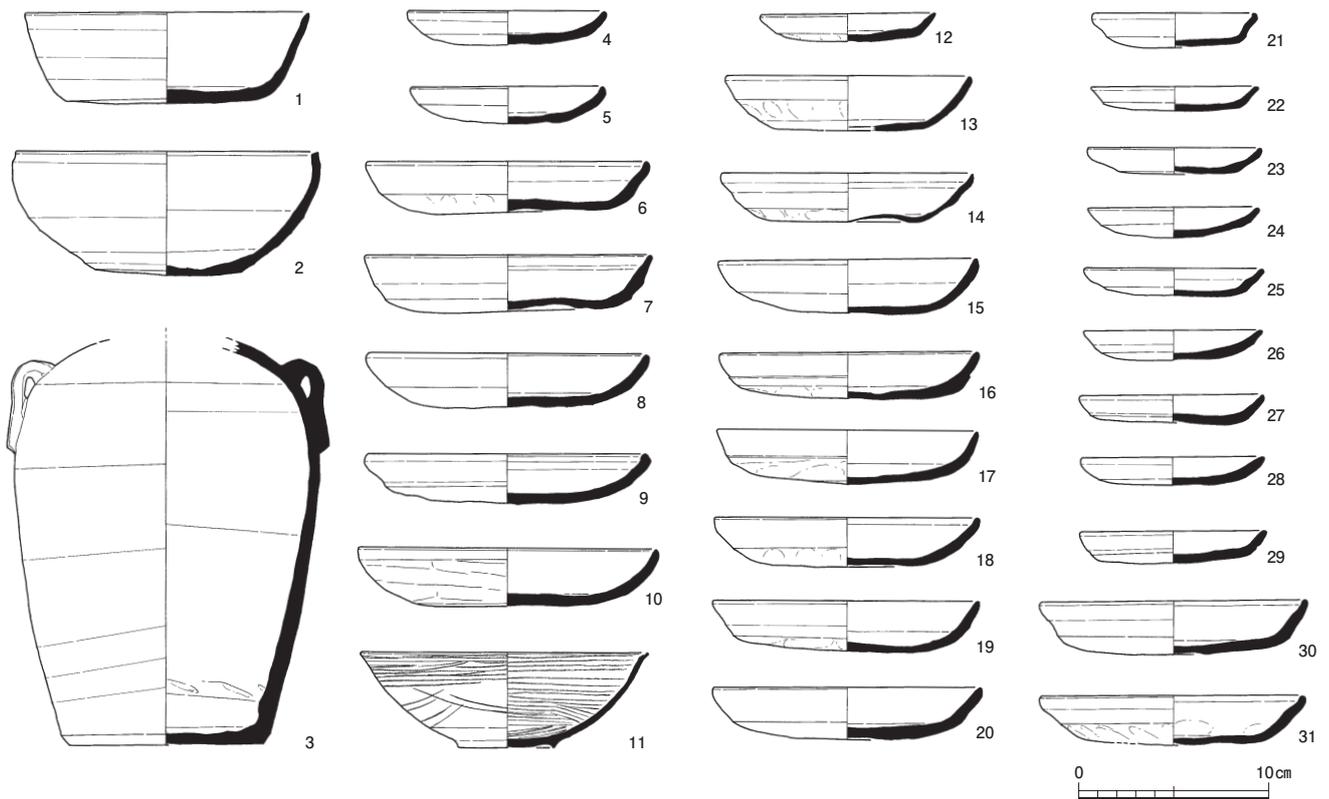
土器溜SU10442・10443・10444 調査区の北端で検出した3基の浅い土坑。いずれも大きさは長径1.4m程度、深さ20cm程度。埋土から大量の土師器が出土しており、まとめて廃棄したものともみられる(図Ⅲ-67)。出土した土器の年代は、SU10442・10443が13世紀中頃、SU10444が室町時代に属する。

土坑SK10445 調査区中央よりやや北よりで検出した円形土坑。径1.2m、深さ50cm。東側は土管暗渠SD10430の据付掘方を壊す。埋土から瓦と土器が出土しており、土器の年代は江戸時代とみられる。

土器溜SU10446 調査区中央よりやや北よりで検出した不整形な浅い土坑。南北2.2m、東西1.6m。埋土から完形を含む土器が出土した。後述の南北溝SD10434と遺構の重複関係がありこれより古く、掘立柱建物SB10440の間柱柱穴より新しい。出土土器の年代は13世紀中頃とみられる。

土器溜SU10447 調査区中央よりやや南よりで検出した不整形な土坑。東西1.2m、深さ10～20cm。この土坑の底から掘立柱建物SB10440の柱穴を検出した。埋土には13世紀から室町時代の土器を含む。

土坑SK10453 調査区東南隅で検出された小土坑。長径30cm、深さ15cm。埋土から鋳型片、銅滓などが出土しており、鋳造に関する遺構とみられる。SK10453の西隣



図Ⅲ-68 第516次出土土器 1 : 4

で甗炉の底部になる可能性がある遺構が検出され、調査区南部では遺構にともなわないが埴塙片などが出土しており、何らかの金属生産がおこなわれていたとみられる。

南北溝SD10434 調査区中央を南北に縦断する近代の素掘り溝。幅70cm、深さ30cm程度。調査区の南側では土管暗渠SD10430のすぐ東に位置し、その据付掘方を壊す。調査区の中央付近で東にクランクし、これ以北では東に2.4mずれた位置にある。 (番 光)

4 出土遺物

土器・土製品

調査区全域から鎌倉時代から室町時代にかけての土師器皿が大量に出土した。ほぼ完形に近い状態で出土した皿は、鎌倉時代の橙褐色を呈する土師器皿が中心で、室町時代の赤土器・白土器も一定量出土したものの、ほとんど破片であった。その他、若干ながら古代の須恵器、緑釉陶器も出土した。以下、遺構にともなうものの概要を述べる。

穴SP10441 須恵器杯A、鉢、双耳壺が出土した。図Ⅲ-68、1はほぼ完形の杯A。2はやや小型で平底の鉢。3は肩部の対称位置に耳がつく双耳壺。耳は細丸く伸ばした粘土紐を貼付ける。土師器がともなわず、詳細な時

期は決めがたいが、双耳瓶の耳の造形や鉢の器形などから平安時代に入る可能性もある。

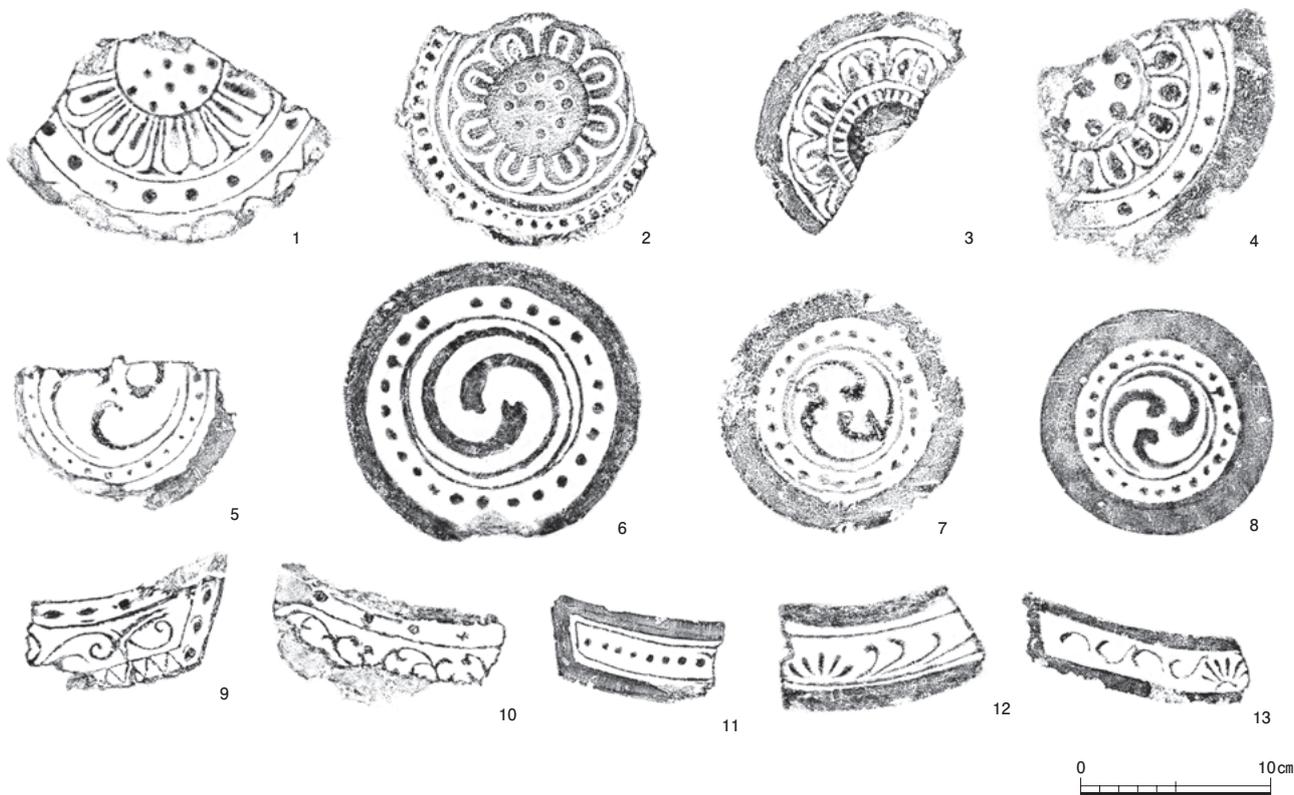
土器溜SU10446 ほぼ完形の土師器皿が多数出土したが、大皿の方が多い。小皿(4・5)は10.0~10.5cm、大皿(6~10)は口径約15~16cm。大皿は口縁端部を二段ナデし、上段のナデは端部を内側に折り込む。小皿はいずれも一段ナデで、灯明の痕跡を残すものもある。10はやや大型で、底部外面にケズリ調整を加える点で珍しい。調整技法と口径から13世紀中頃であろう。瓦器椀(11)は口径約15cm、高台は矮小化している。川越編年のⅢ段階B型式に属する。

土器溜SU10442 完形の土師器皿は大皿(13~20)が多く、小皿(12)は少ない。いずれも口縁部は一段ナデ。口径は大皿が13~14cm。小皿9.5cm。13世紀後半頃であろう。

土器溜SU10443 土器溜SU10442と同様、完形の土師器皿が一定量出土したが、対照的に大皿(30・31)が少なく、小皿(21~29)が多い。口縁部のナデは一段。口径は大皿が13.8cm、小皿が8.2~10.0cmで、SU10442と同時期であろう。 (神野 恵)

瓦磚および土管類

本調査区出土の瓦磚類および土管の数量は表Ⅲ-6に示した。



図Ⅲ-69 第516次出土軒瓦 1 : 4

瓦磚類 本調査区からは奈良時代から江戸時代まで多くの瓦が出土した。特に軒丸瓦では中世のものが多く、古代や近世以降のものは少ない。軒平瓦では古代のものと中世のものがほぼ同数で、近世以降のものが少ない。

遺構にともなって出土したものは少なく、包含層出土のものが大半を占める。奈良時代の軒瓦では興福寺創建瓦の6301Aが11点と多くみられるが、セットとして用いられたとみられる6671Aの数はやや少ない。また、平安時代以降の軒瓦についても特定型式の偏在はみられないため、いずれの時期においても西室に用いられた軒瓦の組み合わせは確定できない。

西室大房SB10450基壇土直上の包含層からは室町時代以前の軒瓦のみが出土しており、江戸時代以降のものが含まれないことは、西室大房の廃絶年代を考える上でも示唆的である。また、土管暗渠SD10430からは円形に蓮華文を持つ刻印瓦をはじめ、室町時代以前の軒瓦が出土しており、江戸時代以降のものは含まれない。SD10430は西室の廃絶後、室町時代の間に設置されたものと考えられる。以下、遺存状態の良好なものと遺構にともなって出土したものを中心に述べる。

図Ⅲ-69、1・4・9・10は表土ならびに包含層出土。1は奈良時代の6301A。4は鎌倉時代。9は奈良時代の6671J。10は平安時代。2・3・5はSB10450の礎石抜取

穴出土で、いずれも平安時代。この他にも礎石抜取穴からは数点の軒瓦が出土しているが、奈良時代から鎌倉時代のものに限られる。7・11は土管暗渠SD10430、8はSD10430の抜取溝出土で、鎌倉～室町時代。6は掘立柱建物SB10430の柱抜取穴出土で、鎌倉時代か。12は土坑SK10439、13は南北溝SD10434出土でいずれも室町時代。

(川畑 純)

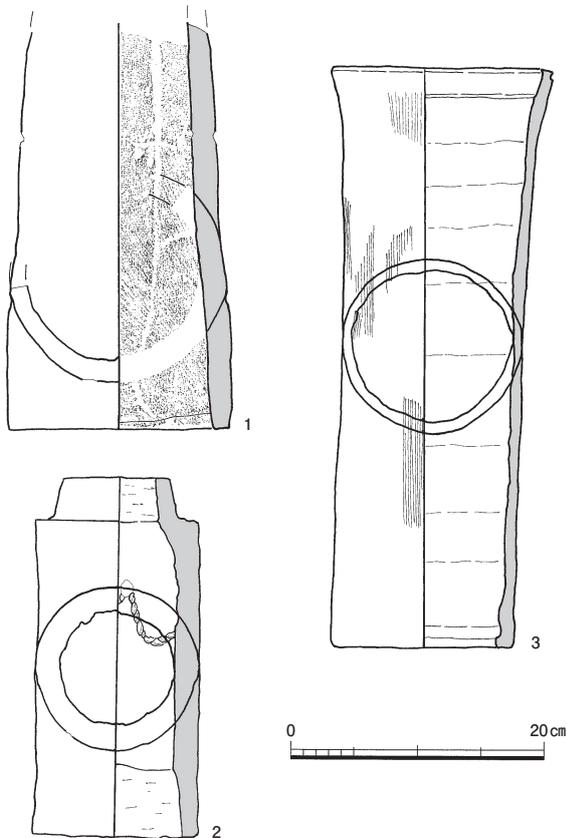
土管 本調査区では、土管を用いた暗渠を複数検出した。土管の形態は遺構により異なる(図Ⅲ-70)。

土管暗渠SD10435・10436・10438には行基式丸瓦円筒土管を用いる。1はSD10438出土。粘土板技法で、内面の布目が粗く、吊り紐痕はない。平安時代以前とみられる。

2・3は土管暗渠SD10430出土。SD10430では、玉縁式丸瓦円筒土管(以下、玉縁土管)と、片側がソケット状に開く土管(以下、ソケット土管)とを混用する。SD10430には、玉縁土管列の中に部分的にソケット土管が入る箇所があり、後者が後世の補修である。2は玉縁土管。広端部内面を約5cmの幅で大きく削り、土管が連結しやすようにする。内面には吊り紐痕が残り、吊り紐が布袋内面に通し縫いされていること、吊り紐の内外の比率が1:5～1:7であることから、14世紀中頃から後半のものであろう⁶⁾。このほかにも玉縁土管とし

表Ⅲ-6 第516次出土瓦磚類・土管一覧

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	丸瓦(刻印)	20	
6234	Ab	1	6671	A	2	丸瓦(へら書)	3	
6235	F	1		J	1	平瓦(刻印)	31	
6301	A	11		L	1	隅切平瓦	5	
	I	1		?	4	鬼瓦	2	
6307	J	1	6682	D	4	面戸瓦	36	
奈良		2	6732	Fa	1	熨斗瓦	3	
古代		23	6739	A	1	磚(線刻)	1	
中世		22	6763	C	2	棧瓦(刻印)	1	
近世～		4	古代		26	雁振瓦	4	
巴(古代～中世)		12	中世		40	伏間瓦	1	
巴(中世)		80	近世		13	隅木蓋	1	
巴(中世～近世前半)		11	時代不明		4	目板瓦	6	
巴(近世後半～)		14				瓦製円盤	1	
巴(時期不明)		2	軒平瓦計		99	用途不明道具瓦	12	
時期不明		4	軒棧瓦			土管	64	
			種類		点数			
			近世		3			
軒丸瓦計		189	軒棧瓦計		3	その他計	191	
	丸瓦		平瓦			磚	凝灰岩	レンガ
重量	682.721kg		1325.82kg		19.605kg	139.949kg	0.425kg	
点数	5292		15737		8	221	1	



図Ⅲ-70 第516次出土土管

ては内面の吊り紐痕が玉縁部と胴部の2ヵ所にあり、狭端内面を段状に削るものがある。2と同時期と考えられる。3はソケット土管で、丸瓦円筒を転用したもので

なく、専用の土管である。粘土紐技法で、外面にはカキ目をもつ。奈良市古市城で出土した16世紀の土管と形態や製作技法が類似しており、近い同時期のものと考えられる⁷⁾。

このほか、土管暗渠SD10431には玉縁土管が、土管暗渠SD10432にはソケット土管が用いられていた。また、SD10430・10431・10432には、土管保護のため上面に丸・平瓦を載せている。これらの一部には菱形や菊花形、円形等の刻印が確認でき、室町時代の瓦にみられる特徴として注目できる⁸⁾。

(石田由紀子)

金属製品・石製品

鉄製品 表土、包含層などから鉄釘が52点、鉄鏝5点、鉄刀片2点などが出土した。鉄釘には、丸釘や角釘の両方が含まれる。角釘には方頭釘が3点みられる。遺構にともなうものもあるが、それらは小片で頭部形状などをうかがうことはできない。鉄鏝は、表土からではあるが完形品が出土しており、長さ14.2cm、幅4.1cmを測る。

冶金関連遺物 土坑SK10453からは、鋳型片、銅取瓶片、銅滓、粒状滓、鍛造剥片などが出土した。これらの大部分は、埋土を水洗選別したことによって検出されたもので、いずれも小片である。また表土からではあるが、坩堝片が出土した。坩堝片の出土位置はその他の冶金関連遺物とは若干離れているものの、いずれも調査区南東部から出土しており、西室大房廃絶後にこの付近において、何らかの金属生産活動がおこなわれていたと考えられる。

石器・石製品 砥石片、石硯片、滑石製石鍋片(底部片)などが出土した。砥石はいずれも小片で、表土、包含層からの出土である。硯は粘板岩製で、上側辺部分が残存し墨堂の一部が認められる。側縁部は連弧状に整形する。西室大房SB10450南妻中央の柱の礎石採取穴から出土。

(芝康次郎)

5 まとめ

西室大房SB10450の規模 西室大房SB10450の創建当初の建物規模がわかる礎石、礎石据付穴、基壇外装、雨落溝などの遺構を確認した。また、再建の際には創建建物の位置と規模を踏襲していることが判明した。

建物規模は南北62.54m(212尺)、東西11.8m(40尺)、桁行10間、梁行4間、柱間寸法は桁行の南端2間が4.72

m (16尺)、以北が6.64m (22.5尺) 等間、梁行は2.95m (10尺) 等間に復元される。基壇外装は凝灰岩製で、地覆石と羽目石が残存する。妻柱筋柱心から地覆石外側までの寸法は南面で2.1mであった。東面は2.7mに復元できる。北面は1.8mとなり、基壇の出が南面と北面で異なることになる。基壇の高さは、基壇上面に礎石が10cm出ていると仮定すると、約45cmに復元できる。

今回の調査で得られた西室大房の建物規模は、冒頭に述べた従来の復元案とは異なる。ただし、『興福寺流記』をはじめとする諸資料に記述される建物規模と異なる点があること、建物西面の基壇外装やその痕跡を確認できなかったことなど、課題も残されている。

掘立柱建物SB10440の解釈 西室大房SB10450の西側に古代に属するとみられる掘立柱建物SB10440を確認した。桁行7間以上、梁行2間で、桁行方向の柱割りがSB10450と揃っており、西室大房と同時併存していた建物とみるのが自然である。創建時期を明確に判断できる遺物などは確認できなかったが、西室小子房であった可能性がある。ただし、SB10440を西室小子房と判断するには以下のようないくつかの問題点がある。

まず、1959年の調査では中室小子房の基壇外装を検出し、礎石の痕跡は基壇上面の削平により確認できなかったとしている⁹⁾。つまり、小子房が礎石建物と判断されているのである。中室と西室は講堂を挟んで対になる僧房であり、その小子房の仕様が大きく異なっていたとは考えにくい。つぎに、一般的に僧房において、礎石建物の大房に掘立柱建物の小子房が併存するののかという問題がある。そして、検出した遺構も桁行方向の柱間が約6.6mと広いので、側柱筋では構造的に間柱が必要であったと思われるが、間柱と想定される柱穴は大きさ、形、深さが不揃いである。また、SB10450とSB10440の間は柱心々距離で約2.5mと狭く、軒の形状や雨仕舞については課題が残る。このほか、西室大房と小子房の両方が描かれる絵画資料には、鎌倉時代後期の「興福寺堂舎図」(水室神社蔵)や、室町時代の「春日社寺曼荼羅」(奈良国立博物館蔵)などがあるが、いずれも両者の間には3～4間の繋廊が描かれており、今回検出した軒を接するような遺構とは様子が異なっている。

このように、SB10440を小子房と断定するには問題点もある。SB10440が小子房でなかった場合、興福寺伽藍

成立以前の建物であった可能性も指摘できるが、桁行方向の柱間が南端2間のみ狭いという柱割りをとる理由が不明となり、いずれにせよ課題が残る。興福寺をはじめとする古代寺院僧房の調査事例の増加、および興福寺を描いた絵画をはじめとする諸資料の調査の進展をまちたい。

土管暗渠・土器溜と建物との関係 本調査区では複数時期にわたる土管暗渠と土器溜を検出した。これらの遺構の年代は、西室大房SB10450、掘立柱建物SB10440の廃絶時期と関わるので、この関係を整理しておきたい。土管暗渠は少なくとも3時期に敷設されている。土管暗渠SD10435・10436・10437の一連が最も古く、SB10440の範囲と重複するが、柱穴との重複関係はない。土管暗渠SD10430・10431・10432の一連はSB10440廃絶後に敷設したものである。SU10442・10443・10444をはじめとする土器溜はSB10440と重複しており、一部の柱掘方はこの土器溜りを完掘したのち検出されている。つまり、SB10440は13世紀後半ごろには廃絶していたとみられる。いっぽう、SB10450はこれらの土管暗渠、土器溜とは重複せず、SB10440より後まで建物が存続していたとみられる。

なお、2014年度には西室北端の調査をおこなう予定である。上述の西室大房や掘立柱建物の規模およびその創建と廃絶の年代については、その成果をあわせて改めて報告することとしたい。

(番)

註

- 1) 図中の伽藍復元図は、大岡実『南都七大寺の研究』中央公論美術出版社、1966に基づく。
- 2) 奈文研『奈良時代僧房の研究』1957。
- 3) 奈文研『興福寺食堂発掘調査報告』1959。
- 4) 前掲註1。
- 5) 前掲註2。
- 6) 奈文研『中世瓦の研究』2000。
- 7) 奈良市教育委員会「古市城の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』1989。
- 8) 藪中五百樹「南北朝・室町時代に於ける興福寺の造営と瓦」『立命館大学考古学論集Ⅱ』2001。
- 9) 前掲註3。